

【理事長対談】——二松學舎の過去・現在・未来——
 昨年九月に就任した水戸理事長が本学と縁の深い人物を招くシリーズ企画。今回は二松學舎第三代会長、洪沢栄二翁の玄孫にあたる洪沢健氏とともに、二松學舎のめざす姿を探ります。

『論語と算盤』に読む

現代へのメッセージ



シブサワ・アンド・カンパニー株式会社 代表取締役

洪沢 健 SHIBUSAWA Ken

1961年生まれ。テキサス大学化学工学部卒業後、UCLA大学にてMBAを取得。米系投資銀行、米大手ヘッジファンド等を経てシブサワ・アンド・カンパニー株式会社、コモンズ投信株式会社を創業し、『論語と算盤』経営塾や30年長期投資など画期的な事業を展開している。著書に『洪沢栄二100の訓言』（日本経済新聞出版社）ほか多数。

学校法人二松學舎 理事長

水戸 英則 MITO Hidenori

1943年生まれ。九州大学経済学部卒業。日本銀行に入行後、フランス政府留学。帰国後、行政機関の委員や銀行役員を務め、2004年より二松學舎大学事務局長、常任理事を歴任。2011年理事長に就任。国際政治経済学部非常勤講師。

経済と道徳は車の両輪。両方が揃ってこそ進み続けられる——洪沢 健

水戸 本学の創設者、三島中洲は「義理と利害とは相まって離れないもの」という「義利合論」を提唱していました。洪沢栄二先生も『論語と算盤』で「道徳と経済は両立させなければならぬ」と語っておられ、二人は互いに賛同して親交を深くしたとされています。洪沢さんは『論語と算盤』をどのように見ておられますか。

洪沢 「論語」とは道徳、「算盤」は経済を意味しています。明治末期から大正の頃、洪沢は国を強くするには民間力を高め、それには目先の利益より信用を高める必要があると考えました。その基盤としたのが『論語』、つまり道徳です。道徳という固いですが、平たく言えば「人として当たり前のことを当たり前にしよう」ということ。利益追求だけでは富は永続しません。道徳と経済は車の両輪で、どちらかが大きくても進まないのです。私は『論語と算盤』を二十世紀の視点で解釈し、サステイナビリティ（持続性）のための思想だと考えています。

二松學舎の将来的なビジョンにも東洋の思想が不可欠です——水戸 英則

水戸 今、二松學舎では十年後、二十年后に向けた長期ビジョンを描こうとしています。経済的にも東アジアの時代といわれる今、本学は漢学塾に始まり、東洋の精神による人格の陶冶を建学の理念としていくわけですから、その教えに基づいて、自ら考え行動する倫理性を備えた人間、そして東アジアで活躍できる人材を育成すべきだという意見が多く寄せられています。洪沢さんは、これからの二松學舎には何が期待されていると思われませんか。

古典のイメージがあり、そうした特色ある教育が期待されていると思います。古典というと古くさくさく思われがちですが、それは長い歴史を経て私たちにバトンタッチされた多くの人の知恵です。歴史はうねりですから、過去の波を温故知新として将来に役立てることが大切。建学の理念に基づいて将来を見据えた長期ビジョン、そしてこれからの教育に期待します。私も『論語と算盤』を機に『論語』を学び、孫子や老子も勉強しました。洪沢も言っていますが、古典は自分のストーリーとして置き換えることで生きてくるものだと思います。

水戸 『論語』には、人生で遭遇するあらゆる局面への言葉が載っていますね。すべて読み解いて実生活に活かすことができれば、本当に強みになると思います。

洪沢 そうですね、広大で多様な東アジアにも人間として共通する土台があつて、そうしたメッセージは『論語』などの古典にも登場します。『論語』は秩序ではなく土台です。東アジアが台頭する時代には、多様性のなかにもそれぞれが人として当たり前の土台を持つことが大切になると思います。



三島中洲（一八三〇〜一九一九）漢学者。儒学者山田方谷の元で陽明学を学び、新治裁判所長、大審院判事（現在の最高裁判所判事）を務める。明治十年「漢学塾二松學舎」を創設し、漢学・東洋学の発展に尽力。



洪沢栄二（一八四〇〜一九三二）実業家。大蔵省を退任後、民間企業の発展と社会的地位向上に努める。第一国立銀行を始め約五百の企業、六百の社会・公共事業の設立に関与し、「日本資本主義の父」と呼ばれる。



現代語訳『論語と算盤』
 洪沢栄二著／守屋淳訳
 （筑摩書房）

中国の思想家、孔子の言行を記した『論語』の教えを実業に於けるは、道徳と経済を致させることが個人や社会全体の成長につながることを説いた。